

福島理恵子氏

メンバーは同じ志を持つ仲間。 その気づきが壁を越えさせた。

Talk トーク Square



理科の「理」は理恵子の「理」

——福島さんは、専用メガネをつけずに3D映像を見ることができた世界初の液晶テレビの開発をされましたが、まずは研究者の道に進まれたきっかけを教えてください。

すごく単純なんですけど、小学生のときに時間割を見て、理科の「理」が理恵子の「理」と一緒だなと思って、まず親近感を持ちました。それと、高校に入って文系・理系にコースが分かれるときに、たいてい女子は文系、男子は理系つてなりませよね？ そのムードに逆らいたくて(笑)、理系を選びました。

大学は理学部で化学を専攻し、研究者と初めて接したのが研究室に配属された4年生のとき。ドクターやマスターの先輩方が、夜12時なんて当たり前、夜通し議論してるんです。しかもやらされてるんじゃないやなくて、楽しそうに。ああ、私もこんなふうになりたいなと思いました。

——その後、大学院を経て東芝に研究職として入社されます。決め手は何でしたか。

私が入社した95年は「就職氷河期」と言われる最初の年です。先輩たちからは就職活動でこんなところで食事をしたとか、羨ましくなる体験談をたくさん聞いていたのですが、いくらエントリーしてもちっとも連絡がない。面接を申し込んでも「今年は女性の採用はありません」と言わ

れたり、書類選考で落とされることも多くて、自信をなくしていました。

大学では有機化学の研究をしていたので最初は材料メーカーを受けていたのですが、なかなか結果が出ず、初めて受けた電機メーカーの東芝から内定をもらいました。実はその年、私が所属していた学科で東芝が内定を出した2名がどちらも女子だったんです。これは男女を分け隔てなく扱ってくれる会社だなと思って決めました。

芽が出なかった20代のころ

——入社後はなかなか結果が出なかったとおっしゃっていますね。

そうですね。自分がいかにできないかを突きつけられたというか。液晶ディスプレイの研究開発に配属されたのですが、もう何年も前から先輩方が積み上げてきた研究ということもあり、私が何を考えてもすでに検討済み。自分の切り口が見つからず苦しみました。誰かがテーマを与えてくれるわけでもなく、先輩方の後を追っかけているだけでは研究者としての存在意義がないってことを痛感しました。

せっかく男女分け隔てなくなってくれた東芝に、「女性を採用してみたけど今一つ」という悪しき前例をつくりたくない。そう思ってふんばりましたが、20代はやっぱりなかなか芽が出なかったですね。

プロフィール◎ふくしまりえこ

1971(昭和46)年東京都出身。東北大学理学部、同大学院卒業後、95年に東芝に入社。液晶材料の研究に従事する。30歳で出産、31歳で職場復帰。東芝独自の裸眼3Dディスプレイの研究に携わり、07年「映像情報メディア学会技術振興賞 開発賞」、10年「発明協会 全国発明表彰21世紀発明賞(第二表彰区分)」などを受賞。同年、日経ウーマン主催の「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2011」で大賞にも選ばれる。現在、東芝研究開発センター マルチメディアラボラトリー主任研究員兼エコテクノロジー推進室参事。

—— 29歳で結婚、30歳で出産。育休後、裸眼3Dディスプレイの開発チームに参加されます。

当時、東芝では10年先を見据えた新しい研究テーマに取り組み、私もゼロベースからの議論に参加することができました。それぞれ専門分野の人が集まって、とにかく一人の研究者として対等に扱ってもらえることがうれしくて、「このプロジェクトを成功させるためだったら何でもやるぞ」って思いました。

そういう環境の中で、運もよかったですと思いますが、ディスプレイとレンズの組み合わせを最適化する着想を得ました。「これで東芝の3Dのコアになる考え方ができたな」と上司に言われたときはうれしかったですね。

あるがままの姿を見せる

——その後、量産化の技術検討ワーキンググループのリーダーとして取りまとめ役を任せられます。ご苦労も多かったのでは。

もう苦労の連続です(笑)。研究段階から、めでたく量産化検討に入ったわけですが、やはり研究所で1台手づくるとは訳が違う。しかも私にとっても初めての経験。でも、リーダーの私が不安な顔をしていては現場が混乱するから、とにかく旗を振って前に進まなくてはならない。

これは大きなプレッシャーでした。

うまくいかないことが続くと、「このリーダーでは、だめなんじゃないか」と周りに思われている気がしてくる。内心、私も無理かもしれないと弱気になったこともあります。でも、もし私がそこでギブアップして、別の人にリーダーをお願いしたとして、その結果プロジェクトが失敗したら納得ができるのかと自問自答してみたら、やっぱりできないんですね。だったら自分が納得できるまでやろうと思いました。

——リーダーという立場で、メンバーへの接し方にはどんなことを心掛けましたか。

マネジメントの本もいくつか読んだし、上司からも学ぼうとしたのですが、行き着いたのは、やっぱり私は私のあるがままの姿でやるしかないってことでした。私はどちらかといえばネガティブ思考なので(笑)、明るくみんなを巻き込むことはできない。ただ、一生懸命さが大切だと思ったので、とにかく誠実、真摯に物事にあたろうと決めました。最初、リーダーは間違ったことを言うてはいけないと気負っていたんですね。とにかく準備して、どんな質問や反論にも即答できるようにする。それがリーダーシップだと思っていたんですが、よく考えたら、集まっているメンバー

は専門家だし仲間なんですよ。それぞれが志を共にする専門家の集団なんです。

会議に出ても、自分のリーダーとしての資質を周りに問われているのではないかと背伸びしていたのですが、そうじゃない。みんなものづくりへの情熱を燃やす研究者で、一緒に高い壁を乗り越えたいと思ってる仲間なんだ。そう気づいてからは、助けてくださいと素直に言えたり、それぞれの得意分野から意見を出してもらい、その結果、私一人ではとうてい登れない壁を乗り越えることができました。そうした協力体制がなかったら、このプロジェクトは絶対に成功していなかったと思います。

——育児との両立という面でもご苦労は多かったと思います。

私の場合、育児休業から復職してすぐに3Dテレビの開発に携わったので、子どもの年齢とディスプレイの開発期間が一緒なんです。量産検討のリーダーになったのは5年目で、まだ子どもが保育園に通っているころでした。だから送り迎えもあるし、長期の出張もできない。テレビ会議の途中、「お迎えがあるので失礼します」と画面から消えたり(笑)、残業ができるのは火曜日だけと決めていたので、出張は必ずそこに入れてもらったり。そうした働き方を認めてくれ、サポートしてくれた上司やメンバーがいたからこそできたと思っています。

——最後に働く女性へのメッセージをいただけますか。

育児との両立など、女性はキャリア形成で壁にぶつかるとも多いと思います。私もそうでした。でも、一つ経験することには視野が広がり、新しい見方ができるようになる。だから今見えているだけの景色であきらめるのはもったいない。踏みとどまっていればほしいと思いますね。

それと、何事もやらされるのではなく、そこに意義を見出して主体的に取り組んでほしい。そうすれば自分の自信につながります。寄り道と考えることも、後から振り返れば意味があったと感じられることは多いものです。だから一つ一つ、自分が納得できるまでやり抜いてほしいですね。



「ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2011」(日経ウーマン主催)の表彰式



3Dテレビ最新モデル

視聴者の見る位置に応じた自然な高画質ガラスレス3D映像を実現

※3D映像の画面は効果をわかりやすくしたイメージです